

# 第二回 齋藤茂吉短歌文学賞

〔選考委員〕

委員長 近藤 芳美  
委員 扇畑 忠雄

本林勝夫 『齋藤茂吉の研究 その生と表現』 桜楓社

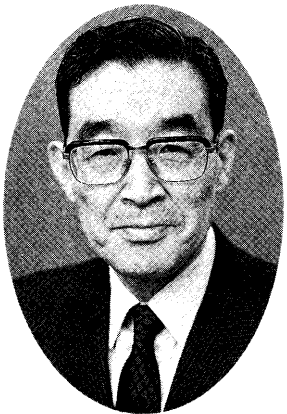
大岡 信

塚本 邦雄

馬場あき子

(五十音順)

正賞・茂吉自筆の短歌織画／副賞・賞金百万円



齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

本林勝夫(もとばやしかつお)

大正8(1919)生まれ 71才 石川県出身  
東北大学大学院修了(国文学専攻) 共立  
女子大学名誉教授 文学博士

近代短歌研究家(とくにアララギ派、齋藤  
茂吉)。論文に「茂吉短歌私解二十首」(昭和  
40年)、「『白き山』雑考—煩惱歌の系譜」「ア  
ララギ派の主張とその系譜—茂吉・文明を  
中心に」(昭和46年)、「明治30年代、短歌にお  
ける〈近代〉の契機—新詩社と根岸派」「逍空  
と茂吉に関する断片」「短歌とは寂しき道か  
—晩年の茂吉と歌」(昭和52年)、「与謝野晶  
子と山川登美子」「子規覚書—子規と茂吉を  
めぐって」(昭和55年)、「茂吉随筆にあらわ  
れた女性たち」(昭和61年)等の論文あり。  
『齋藤茂吉一人と作品』『齋藤茂吉論』『齋藤  
茂吉集』(注釈)『近代歌人』等の著書。

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会

事務局

〒990 山形市松波二丁目八一

山形県生活福祉部生活文化課

☎〇三三六(三〇)二二五八

## 齋藤茂吉短歌文学賞受賞作

### 『齋藤茂吉の研究 その生と表現』より

茂吉は生涯にわたって森鷗外の人と作品に傾倒し、あくことを知らなかったかに見える。しかし、茂吉は結局のところ、鷗外作「空車」の「虚」よりも、「玉菜ぐるま」の「実」に執し、そこに神の示現を見出す人であった。

この「玉菜ぐるま」を書いた当時の茂吉は、病院焼失直後の困難に満ちた生活にあり、したがってそういう状況における心境が何ほどの程度でそこに反映していることも争われない。つまり、ヨーロッパで見た車の印象は、彼の生を励ます何ものかの写象として、その目に再現されていたであろう。ただ、その写象が現実における「実」なるものの充足した姿である点において、それはあくまでも「茂吉の車」であった。

(抄出 本林勝夫)

### 受賞のことば

本林勝夫

このたび第二回の齋藤茂吉短歌文学賞をいただくことになり、他ならぬ茂吉の名のつく重い賞だけに光栄であり、また大きな喜びを覚えております。

私が最初の茂吉に関する著書を出したのは昭和三十八年の五月十四日でしたが、この日付は没後十年の生誕の日を記念して、とくにそのことを書店に希望したものでした。以来研究は格段に進みましたが、いまその生誕の日を受賞することに深い感慨をおぼえております。茂吉学とも言うべき領域が出来るほど研究の盛況を見るようになった今日、あらためて受賞の栄をになう一人としての責任もまた感じている次第です。

私の好きな茂吉のことばに、われわれは、「いつも高いものと深いものを目がけて、常に寂しい心を持っていなければならぬ」というのがあります。偉大な芸術を前にしたときの到底自分ほそれに及ばないという感動、それをいつまでも失ってはならないというのです。

私はこのことばを思いながら、今後も高峰を仰ぐ気持で心を励まし、研究をつづけてまいりたいと思っております。